

令和元年6月29日現在

機関番号：87106

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02161

研究課題名(和文) 出土・在銘遺品を中心とした調査による明代彫漆器の基礎的研究

研究課題名(英文) Baseline study on Chinese carved lacquerwares of Ming dynasty with a focus on excavated pieces with inscriptions

研究代表者

川畑 憲子 (Kawabata, Noriko)

独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館・学芸部文化財課・室長

研究者番号：00463505

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、わが国にもっとも数多く伝世している中国明時代の彫漆器に焦点を当てており、在銘・出土遺品に見られる制作地や制作年代に関する情報を整理し、他の関連作品との比較検討を目指した。最終年度となる本年度は、これまでに蓄積したデータを活用し、文様の種類や構成、彫漆技法、銘文、木地構造などの特徴を、総合的かつ詳細に解明することに注力した。また、研究対象資料のなかでもとりわけ重要な位置を占める永楽年間・宣徳年間製の彫漆器に特有な様式を実証的に捉えることに努め、これらを参考にしたと考えられる和製唐物の考察につながる成果を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在、日本に伝世している明代彫漆器は大変多いものの、その製作年代や製作地などが正しく捉えられているかという点必ずしもそうではない。その原因としては、彫漆器に関する文献資料の少なさや、後世の改修あるいは模倣作の多さなどがあげられる。

本研究では、国内外に所在する明代彫漆器について、とりわけ基準資料となる出土・在銘遺品を中心につぶさに調査し、これらを比較することによって、明代彫漆器における様式の変遷、あるいは明代彫漆器を手本として製作された和製唐物について、考察を深めることができた。和製唐物は、現代へとつながる日本の近代漆器産業を考えるうえで重要な存在であり、その解明は今後の課題である。

研究成果の概要(英文)：This study deals with Ming China carved lacquer wares that have abundantly been handed down in Japan with a focus on excavated Chinese carved lacquer wares with inscriptions in order to establish their dates and places of production for further reference. In the third and last year of this grant-in-aid for scientific research, various topics like decorative motifs, their patterns and compositions, carving techniques, inscriptions, wooden base construction and others of Chinese carved lacquer wares have thoroughly and extensively been discussed based on the fruit of the past survey trips. Above all, some characteristics in the style unique to Yungle and Xuande reigns were factually analyzed and noted in detail, so that some discussion on the Japanese carved lacquer wares that were produced after imported Chinese originals was successfully advanced.

研究分野：東洋漆工

キーワード：東洋漆工

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

室町時代以来、わが国では中国製の漆器をいわゆる唐物漆器として、室内の飾りや茶の湯の道具として強く愛好してきた。現在、日本には膨大な中国製漆器が伝存するが、質量ともに恵まれて、その代表といえるのが彫漆器である。彫漆器は、鎌倉時代末・14世紀頃から日本に請来されて以降、大量に舶載されたと考えられるが、遺例として最も多く見受けられるのは明時代に制作された彫漆器である。

明時代は漆工芸が大いに発達した時代であり、とりわけ永楽・宣徳年間、嘉靖・萬暦年間にもっとも隆盛を見せた時期である。従来の研究史においても、文献資料や遺例によってその制作活動がきわめて盛んであり、かつ多様な作品がつくられたことが実証されており、充実した検討が蓄積されている。しかしながら、それらが対象とした作例群の中には、当時の大きな国内需要に応じて制作されたとおぼしき倣中国製彫漆器(和製唐物)が少なからず含まれている。

こうした漆器は15世紀頃から制作が試みられたと考えられているが、現存する彫漆器には、もはや中国製なのか、日本製なのか、いつの時代に作られたものなのか、制作地や制作年代の判定が難しい作例も少なくない。むしろこの問題は、中国製彫漆器の研究においてはもとより根強い問題であり、彫漆器研究に大きく寄与した展覧会である『彫漆 - うるしのレリーフ』(徳川美術館・根津美術館、1984年)においても、展覧会の検討課題の一つとしてあげられている(荒川浩和「彫漆」、佐藤豊三「座敷に飾られた彫漆器」)。

本研究の代表者は、それまで中国製彫漆器の調査研究を継続的に重ねて、勤務先である九州国立博物館においてその成果を公開し、わが国における中国製彫漆器の受容や鑑賞、使用の歴史、制作技法や様式変遷を紐解くことに努めてきたが(たとえば特集展示「彫漆 - 漆に刻む文様の美」2011年など)、研究を重ねる中で、研究の基礎となる作品の制作地、制作年代の判定に疑問をもつ作例も見つけるようになり、より明確な判定の手がかりを得たいと考えるに至った。また、倣中国製彫漆器の問題は、日本漆芸史の中で中国漆器がどのように吸収され、展開されていったかという大変重要な問題であるゆえ、単発的ではあるもののいくつかの論考や発表において作例研究として提示した(たとえば特別展「台北 国立故宫博物院 - 神品至宝 - 」2014年でのシンポジウム発表「日本でつくられた倣中国製彫漆器」など)。

### 2. 研究の目的

以上の問題意識のもと、本研究では遺例として最も多い明代彫漆器について、まずは基準資料となる出土・在銘遺品の本格的な調査研究を進め、様式を細かく判別し、その特質を明確に捉えたいと考えるにいたった。この研究を遂行できれば、中国製彫漆器の制作地・制作年代判定の手掛かりを得られると同時に、わが国にもっとも多く伝世する明代漆器やそれをモデルとして製作されたと考えられる和製唐物の歴史的展開も少なからず明らかにできるのではないかと考えた。

具体的には、国内外のコレクションに含まれる彫漆器の伝世品、とりわけ基準資料となる出土・在銘遺品を中心に詳細に調査し、そのデータをこれまでの既知の作品と比較して中国漆器の制作地や制作年代を再検討すること、いまだ不明瞭な中国製彫漆器と日本製の倣中国製彫漆器の違いや、倣中国製彫漆器の中の制作年代の差異を見極めること、の二つを目的とし、さらに国内外の所蔵者や研究者との交流を深めて、将来の共同研究のあり方を探ることに努めた。

### 3. 研究の方法

2で述べた研究目的を達成するために、具体的には以下の方法で研究を重ねた。

#### (1) 各年度の調査計画と課題の設定

計画的な研究進行のために、各年度の調査計画と課題を設定した。ただし調査研究の過程で関連して発生した調査や課題についても、当初の計画に限定せず進めることとした。

#### (2) 科学調査を含む作品調査と史料の精査

本研究では、美術史研究の最も基本的な研究手法である実見による作品調査を広範囲に行った。国内外の所蔵者の協力のもと、他機関の研究者と協同して調査を行い、詳細な作品調査をおこなった。具体的には作品の形状、文様、技法をつぶさに記録し、各部を撮影し、これらのデータを整理した。対象とした作品は、国内外に所在する明代彫漆器を中心とする彫漆器(とくに出土・在銘品)約200点である。

本務として行う九州国立博物館の所蔵品研究以外で、研究期間内に実施したおもな調査は以下の通りである。

- ・中国・上海博物館が収蔵する彫漆器を中心とするコレクション、約15点の調査
- ・東京・個人が収蔵する彫漆器、螺鈿のコレクション、約5点の調査
- ・東京国立博物館が所蔵する彫漆器のコレクション、約15点の調査
- ・京都・個人が収蔵する彫漆器、螺鈿、無文漆器のコレクション、約10点の調査
- ・中国・浙江省博物館が収蔵する彫漆器、螺鈿のコレクション、約30点の調査
- ・台北国立故宫博物院が収蔵する彫漆器のコレクション、約10点の調査
- ・台北・個人が所蔵する彫漆器、螺鈿、無文漆器のコレクション、約50点の調査

- ・香港・個人が所蔵する彫漆器、螺鈿、無文漆器のコレクション、約 30 点の調査
- ・東京・永青文庫が所蔵する彫漆器のコレクション、約 5 点の調査
- ・広島・個人が収蔵する彫漆器、1 点の調査

また、科学調査（X線CTなど）が可能な作品については合わせておこない、用いられている漆や木の種類、木地構造についても合わせて調査した。

これらの作品調査によって得られたデータを整理し、文様の種類や構成、彫漆技法、銘文、木地構造などの観点から、作品の様式を細かく分類した。さらに研究目的で述べた問題を掘り下げるため、作品調査データや関連史料の精査を行い、再検討をおこなった。

#### （3）成果の集成と公開

調査によって得られたデータは収集・整理し、今後の研究に裨益するべく検索可能なデータベースとして集成した。これは所蔵者の許可が得られれば公開することも想定している。また、課題の検討結果は、既出のものに加え、論文や発表等で順次公開していく予定である。

## 4. 研究成果

以下に、研究成果の一部を概略する。

### （1）明代彫漆器の銘文 - 永楽・宣徳銘

明時代は漆工芸が大いに発達した時代であり、とくに永楽・宣徳年間と嘉靖・萬暦年間は、最も隆盛した時代であったことは先述したが、とくに永楽年間では官営工房である果園廠において制作されたとされ、銘文は底裏左隅に「大明永楽年製」の針刻銘が縦書きで記される。

これらの銘文入りの作例（新出を含む）をつぶさに調査すると、花鳥文や花卉文の文様構成が緊密で、彫技の調子も力強いという永楽年間製の漆器の特徴が共通する作品群においても、いくつかの書体や銘の入れ方が存在していることが確認でき、特徴を分類することができた。また、明らかに銘文が後入れの可能性が高いと思われるものも少なからずある。それらは、通例、底裏左隅に入れるところが右側に入っていたり、塗膜断文を銘文の一部が横断していたりする作例である。むしろ制作当初の入れ間違いという可能性も考えられるであろうが、官営工房で管理された漆器については考えにくいことと思われる。また、官営工房製の漆器と同様のレベルで制作された彫漆器であっても、銘文が入っていないものも見受けられた。これは銘文が当初あったものを後世塗りこめてしまったものか、現状では不明でありさらなる作風の比較検討を要する。



続く宣徳年間につくられた漆器は、「大明宣徳年製」と鎗金銘を入れ、永楽期の彫漆器につながる作行である。文様は永楽期のものに比べるとやや形式化が進行している印象であるが、銘文には複数の書体、入れ方が存在するが、各文字の大きさやバランス、止め、払いの角度などの観点で見ると共通した特徴があることがわかった。

また、宣徳銘の下には永楽銘を入れたものが知られているが、こうした作例も既知の作例のほか新たに見つけることができた。（図版は「永楽銘の上に刻まれた宣徳銘」楼閣人物堆朱楕圓盤・底裏 東京国立博物館所蔵）

### （2）和製唐物

今回の調査でこれまで未見であった倣中国製彫漆器（これまで中国製と判定されてきた作例も多い）を詳細に観察すると、中国製漆器のなかでもとりわけ永楽・宣徳製の漆器に特徴的な文様構成や彫技を意識した作例がかなり多いことがわかった。花鳥文、屈輪文を彫目深く、強い調子で表しており、こうした漆器の手本としたものが永楽・宣徳製の漆器であったと目される。また、中国製か日本製か判定が難しい作例においては、その漆層や文様構成、形状などに、見分けの手がかりを見出し得ることができた。とくに文様構成は、中国漆器はかなり厳密であり、花鳥文であれば鳥の形姿や鳥の数に規則性があるが、それに則らない作例は和物である可能性が高いことを推定した。



また、倣中国製彫漆器の中での制作年代の差異であるが、これは蓋然性が高い観点を見出しえるに至らなかった。この問題を考えるにあたっては、日本の彫漆工について調査をさらに深める必要がある。今のところ、彫漆作者として門入・堆朱楊成など数人の作者が知られるが、彼らの活動状況の詳細はいまだ明らかになっていない。今後もより継続的な調査を重ねて作例を検討し、日本における彫漆制作を明らかにすることが重要であるという認識を新たにした。（図版は制作地の判別が難しい作例の一例、牡丹堆朱盤 東京国立博物館所蔵）

本調査研究を通じて、これまで知られていなかった新出の彫漆器について多くのデータを得

ることができたことは大変有意義な成果であった。また、当初の対象であった明代の出土・在銘の彫漆器のみならず、宋元、清代の漆器や螺鈿、無文漆器などの関連作品も合わせて調査することができ、貴重なデータを得ることができた。

さらに、調査は現地の所蔵者や研究者の貴重な協力を得て行ったが、作品情報の交換や今後の研究につながる人脈の構築ができ、今後も交流を深めて互いの研究を進展させていけるものと確信することができた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

川畑憲子「後赤壁賦堆朱盤」『国華』1471号、2018年。

〔学会発表〕(計 1 件)

川畑憲子「九州国立博物館所蔵の彫漆器について」中国古代漆器シンポジウム(上海博物館『千年万華 中国歴代漆器芸術』展)2018年。

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。